

地域づくりの改革者は「よそもの・若者・ばかもの」といわれる。秋田県では、一人の若者が、地域の伝統とイラストを融合させた新しい地域づくりに取り組んだ。成功のカギは、若者自身の「好きなイラストで、郷土の埋もれた資源を発掘したい」という思いと、その若者の活動を支えるサポーターの存在だった。

新旧文化の融合が大きな話題に

私は故郷である秋田県羽後町で「美少女イラスト」を用いた町おこしを手掛けた。

最初に取り組んだのは「かがり美少女イラストコンテスト」である。羽後町には700年の歴史を持つと言われる伝統芸能「西馬音内盆踊り」がある。端縫い衣裳を身にまとい、編み笠をかぶった女性たちが「かがり火」の光の中で優雅に夏の夜を舞う姿は幻想的である。

この踊りをモチーフにしたイラストを募ったところ、インターネットを通じ全国のみならず香港・台湾から優れた作品が集まった。伝統文化とイラストという新旧文化を融合させた取り組みが、地元の人だけでなく県外のイラストファンなど多くの方の関心を集めた。

次に取り組んだのは「スティックポスター in羽後町」である。羽後町には重要文化財に指定されている建築が豊富にあり、これらの文化財や自然などをイラストにしてポスターとして売り出した。また、人気イラストレーターに米袋のデザインを依頼した「あきたこまち」も大きな話題となり、マスコミで度々取り上げられた。

大切なのは「好きなことをやる」こと

これらの企画は、行政や企業が主導したのではなく、私個人の趣味が広まった珍しい例である。当時私は大学生だったが、羽後町工業クラブの事務局長であった父や、当時北都銀行西馬音内支店長だった佐々木章さんの協力があり、考えを形にすることができたといえる。

私は「美少女イラストが好きだから」という単純

「新旧の融合」 若者と地域資源を

な理由と、「イラストの魅力を多くの人に知ってもらいたい」という願いからこれらの企画を作り出した。「好きなことをやる」ということが、地域で活動する上でもっとも重要だと思う。

今やマンガやアニメを活かした町おこしは各地にみられるが、既存の作品とタイアップしたものが多い。私の場合、ゼロから新しいキャラクターを作り出している点に大きな特徴がある。

イラストの入った「あきたこまち」が記録的な売り上げを出したことで、経済効果の観点から注目されることも増えた。このヒットに触発され、各地で美少女イラストを使った米袋が登場し、一種のバブルの様相を呈しているが、イラストを掲載するだけで商品が売れるわけではない。

「あきたこまち」のイラストを描いたのはイラストレーターの西又葵さんである。イラストレーターの作風は1人ひとり異なるため、誰に、どんなものを描いてもらうかを考え、イメージを合致させる必要がある。西又さんは誰よりも和装の女性を妖艶に描写し、またこれまで手掛けた作品のなかに「小町」という名前のつくキャラクターがいた。そして、市女笠の女性という、誰が見てもそれとわかるイラストを依頼した。基本を大切に、徹底的に忠実なデザインにしたことこそが、成功の秘訣だったと思っている。

徹底的に品質にこだわる

「スティックポスター in羽後町」では、郷土の「埋もれている資源を発掘すること」にこだわった。観



山内 貴範 (やまうち・たかのり)

1985年秋田県羽後町生まれ。愛知大学文学部社会学科中退後、東京都内の出版社に就職し在籍中。中学時代から地元の学習塾やタウン情報誌などでイラストを手掛けている。最も興味のあるテーマは建築で、社寺仏閣から西洋建築、現代建築まで興味の幅は広い。

(株)スタジオいなご

〒012-1137

秋田県雄勝郡羽後町西馬音内堀回字元城下42-1

<http://inago.ojaru.jp/inago.htm>

TEL・FAX 0183-56-5057

がキーワード 活かす地域づくり

光面ではこれまで見向きもされなかった題材を取り上げ、イラストレーターに描いてもらったことで、既存と最新の文化が融合して、新たな文化が誕生した。

さらにポスターに描かれた名所巡りを行う町外の若者が増え始めた。地元の子どもたちが「見慣れていた建物がこんなに魅力的だったなんて」と、驚きの声があがっていた。

地元の人が気付かない魅力的な資源は、どこにもあるのだ。これを適切な宣伝と結びつけば、地方にはまだまだ再生の可能性は残されている。私の企画は美少女イラストのイメージが独り歩きしているし、その面が参考にされる。しかし、「埋もれている資源の発掘」ができていなければ、単に美少女イラストを使っただけではヒットを出すことは難しいのではないだろうか。

私のよきアドバイザーとなってくれた佐々木章さんは「徹底的に品質にこだわるのが重要だ」と、良く口にしていた。商品自体の品質、そしてイラストの完成度においても同じように言えることだ。また「奇抜さを狙うことよりも、基本を丁寧に行うこと」こそが不可欠と教えてくれた。各地で商品が乱発されるようになった現在、佐々木さんの言葉は一層重く感じられる。

地域づくりは、まず人づくり

これまでの町おこしは、外部から人を呼ぶことだけに力が入り、地域の人材を育成するという肝心なところが欠落していた。私は町外から人を呼ぶこと

以上に、故郷に残る優秀な人材(例えばイラストレーターを目指している若者など)に発表の場を提供することを目指している。

地方の問題点として、才能のある人材が能力を発揮できる環境が存在しないことが挙げられる。

私は、優れた作品を鑑賞する機会を設け、次代を担う若者に刺激を与えたいと思っている。プロが郷土の文化財を描くことは、地域の魅力を再発見するきっかけにもなるだろう。また、若者にイラストレーターと交流する機会を何度も設けてきた。教室はいつも満員で、関心の高さがわかる。

「かがり美少女イラストコンテスト」は、若者の創作発表の場である。ここを舞台に成長した若者に、将来は仕事を依頼したいと思っている。地域づくりは人づくりから始めねばならない。私の挑戦は始まったばかりなのである。



羽後町でのとりくみをまとめた著書の表紙
(7月6日発売)